研究ノート

中井正一研究の視点

——全集刊行に絡めて——

郡　定　也

一

一九四九年、敗戦後における異色の内面的記録『戦後精神の探求』を公けにしたとき、梯明秀氏は戦後ニヒリズムの自覚をふまえてつぎのようにのべた。「戦後時局の荒廃と頽落とのうちに新なる精神的秩序を形成せんがためには、駱駝は獅子に転身して、この荒涼たる砂漠を奔放に疾駆し怒号咆哮する自由を獲得し、この自覚されたるニヒリズムを支配し超克せねばならぬ」。(1) 氏のばあい、一九三五年前後ファッシズムに追いつめられながら開拓せんとしていた主体的唯物論の地平と戦後時局における内面的虚脱（精神的失調）とのあいだの或る苦渋にみちた落差があり、この落差のしたたかな自覚のうえに唯物論と実存哲学との逆説的な同一化という「戦後時局そのものの要請する精神の論理」を告白スタイルをもちいて肉化しようとしたのであった。その記述の底を流れる厳しい自己診断の視線は、おそらくいまもなおわれわれが思索というものの主体的な源泉をつぶさに教えられるところの、きたえられた思想的重圧力をほこっているものと考えられる。しかしそれ以上に本書がこんにち重視されなければならないのは、混迷の戦後時局における思想上の自己確認をめざす悪戦苦闘がつねに、戦前ファッシズムのもとでの「苦悩の表現としての哲

学」、たんに悟性的ではなく理性的にふかめられた「危機の哲学」を射程内においており、それとの癒しがたい断絶からこそ生起しているということであろう。

過去の歴史的自己からの断絶の意識、それに氏は固執した。「……（衝動の）自由は主体的なものであり、主体の内部から創造されるものである。だから、外部の弾圧に抗するのである。外部の弾圧に抗して、内部の歴史的衝動を自由に表現せんとしたところに、十年まえのわたくしに、苦悩の表現として哲学がかんがえられたのであった。この過去の体験が、連続的に、自己意識的に現在の自己に流れこんでいなかった。わたくしの自己意識の連続は現在の空虚によって切断され、過去と未来とがわたくしの自己から拒否されているのである。過去の苦悩の体験は、現在のわたくしの自己を超越した対象として隔絶されており、現在の空虚なる自己には、ただその記憶表象あるのみである。過去の自己を充した歴史的精神は、記憶された現在のその表象のうちに生きて流れていない。現在に、その表象によって呼びおこされるなんらの内容も、ないからである。（中略）回想の一本の系の極限点でしかない現在。それは、まさに過去から未来に引かれた一本の線のうえの幾何学的な一点にすぎない」[2]。しかもそれにもかかわらず、梯氏は、事実として未来に希望をいだかざるをえなかったという。「幾何学的一点としては、わたくしは空虚であっても、この幾何学的一点は何かを志向していた。一つの定まった方向をもっていたというよりは、一つの方向を自ら選択して定めてゆく創造的な微粒子であると信ぜざるをえなかった。わたくしが現在の自己の空虚に徹底することが、自己に忠実である所以だと信じたのは、断絶の深淵が創造の源泉であり、幾何学的一点が自由なる微粒子であることを疑えなかったからであった」[3]。

わたしには、『資本論』を論理学的によみぬくという梯哲学の学問的モチーフと成果についてとやかく語る資格はない。けれどもこの「告白の書」は、すでに戦後思想の一つの記念碑的労作ともみなされるべきものであるし、戦前と戦後とのあいだに介在する思想上、実存上の落差をもっとも主体的内省的に問いつめた点で、すぐれて貴重な文献ということができる。

一九五八年、和田洋一氏は、『灰色のユーモア』によ

って、やはりファッシズム体制下に苦しい抵抗戦線をくんだ京都の一群の文化活動を回想ふうにえがきだした。和田氏はそこで当時のグループ事情や留置場風景や取調べ内容などを、はじめて私小説ふうに、あるいは私記録ふうに明らかにした。それのみではない、回想される過去と回想する現在との落差に独自なユーモアをすべりこませることによって、梯氏とはやや異質の視線をなげかけたのである。[4] これを梯氏の哲学的・自己診断的な視線と対比して、文学的・現象展望的なそれとして特色づけるのもむろん不可能ではないが、しかしそれよりもわたしには、梯氏の内面的苦悩への傾斜度も和田氏の内発的な苦笑への傾斜度も、ともどもにあの一九三五年前後と戦後とのあいだの主体的落差を根底にすえつけたものであり、いわば同じ一枚の銅貨の裏と表、同じ写真のポジとネガにほかならぬと思われるのだ。

和田氏の記述のしかたには、たとえばつぎのようなところに、自然なユーモアがにじみでているだろう。或る晩、木下という巡査部長と和田氏と新村猛氏は、警察のそばのおでん屋で飲み、警察へまたもどってきて雑談をしていた。そのうち木下が和田氏に向って思いがけぬことをいいだした。

「〃和田先生、あんたは警察の取調べにさいして、さっぱりたたかっておらんではないですか。和田先生がマルクス主義者、共産主義者でないことは、誰よりも一番私がよく知っています。それなのにあんたはマルクス主義者にされてしまって、起訴されようとしている。そんなばかなことはないですよ。和田先生はもっとたたかわなけりゃいかんのに、ちっともたたかわなかった。だめじゃないですか、刑務所へ入れられたりなんかしたんでは、お父さんや奥さんに申訳がないじゃないですか、先祖にたいしても申訳がないじゃないですか。『世界文化』のグループの中には、れっきとしたマルクス主義者、共産主義者もいましたよ。そういう人は起訴されて刑務所へいれられても仕方がない、しかし和田先生はマルクス主義者でも何でもないじゃないですか、それに何です、もっとしっかりせんといかんじゃないですか。また留置所へもどって、ひとりになって、睾丸（きんたま）のシワをぐうっとのばして、ゆっくり考えるんですなあ、そしてもうすこししっかりして、人生

をやりなおすんですなあ。〃

木下は、私にたいして「たたかわなかった」という言葉を三度ぐらい繰り返した。留置場にとらえられ、むりやりに治安維持法違反にひっかけられようとしている大学の教授が、こともあろうに元特高から「たたかわなかった、だめじゃないか」といって叱られ、説教される。こんなばかげたこと、こんな滑けいなことが一体あるだろうか。新村君は新村君で横から「そうやなあ、和田君はたしかにたたかわなさ過ぎたなあ」と言葉をはさんだ。(5)」

この情景は、当の和田氏にとっては「全く何ともかんとも言いようのない出来事であった」というのが真実であろう。しかしながらこの幾らか自嘲めいた氏の筆致のうちにも、実は勤務評定や警職法の新聞記事にいきどおり歯ぎしりしている一九五八年の時点での氏の社会意識が間接的に投映されているとみるのが妥当であるならば、和田氏のばあいの歴史的に限定された落差といえども、梯氏のそれと並んでなおすぐれてアクチュアルな転生力をはらんでいるとしなければならない。なぜなら、氏の回想記は、時には誇らかに、時には恥辱に耐えて「奈落の底への地すべりの時代」を身をもって生きた経験を、いわば現在点での自然発生的な苦笑とユーモアに屈折させながら次代へ託そうとしたものにほかならないからである。一九三五年前後の京都「人民戦線」事件に関する史料的ドキュメントとしても、それは、梯氏のそれとともに、あるいはそれ以上にこんにち重視されてよい。

このように、一九三五年前後の自己を一方では断絶感を介して独特の実存上の苦悩へ傾斜させ、他方では距離感を通して巧まざるユーモアへと反転させたのは、ともに歴史的に制約された主体的落差が彼らの回想的視線の奥底によこたわっていたからだと考えられるが、さてそれでは、中井正一にとって事情はどうであったか。遺憾なことに、わたしにはよくわからない。なるほど『美学入門』（河出文庫一九五一）には、「私も、戦争に反対したというので、特高に引っ張られて、なぐられたり、なぐられるよりももっとひどい目にあった時、この世界に、論理の通らない世界のあること、この人民を守る国家機関の中に、論理がなく、かつ人民を苦しめることが公然とゆるされていることに直面した時、突然、私には、この現実が巨大というか「現実とはそんな

ものだったのか」そうだったのかと、自分の前にそそりたったのを憶えている。それは巨大な現実とでもいうべき世界が、眼前に現われた思いであった。そして突然、古代の微笑の数々が、例えば、中宮寺の観音のような、古代の彫刻によく彫られているほほえみが、自分の眼の前を横切ったように思ったのである云々」といったくだりがあるが、[6]ここには落差にかかわる苦渋や苦笑を暗示するようなものはうかがえない。梯式にいえば、現在に流れこんでいる記憶表象あるのみであって、その表象の意味づけが前後の文脈から必要とされただけのことにすぎない。

はたして中井に戦後における落差の自覚があったものかどうかは、一つの問題である。あったとすれば、たぶん彼の詩魂がめまぐるしい自画像をえがきだしたかもしれない、あるいはそうでないかもしれない。もし落差意識がなかったとすれば、何らかの自己救出の道がどこかに託されていたかとも考えられる。可能性はあとのほうが濃厚である。しかしもう一つ、この落差問題への対決が彼の突然の死期によってはたされえなかったのだとする推定も、むげにしりぞけるわけにはいかないだろう。いずれにせよ、この問題は中井評価にまつわる一つの翳った部分であるようにうけとれるのであるが、はたしてどうか。

(1) 梯明秀『戦後精神の探求』理論社、二一ページ。
(2) 同書、五一—五二ページ。
(3) 同書、六五—六六ページ。
(4) 和田洋一『灰色のユーモア』理論社。「私は今これから、特高や思想検事や国粋主義者が大きな顔をし、民衆がおびえ、小さくなっていたあの時期のことを語ろうとしながら、〝ひどい時代だったなあ〟と今さらのように思う。〝ひどい時代だったなあ〟と思う心の根底には、〝今はそれほどではない〟という安心感がひそんでいることは事実で、それだからこそ、当時の私にとって深刻だったことが、今の私にはアホウらしくみえたり、ユーモラスであったりする」(一一頁)。
(5) 同書、一〇七—一〇八ページ。
(6) 河出文庫版、二六頁、全集第三巻、二二ページ。

二

中井の最初の論文集『近代美の研究』は、まだ戦後まもない一九四七年六月、京都の三一書房から出ているが、そのいきさつを中井自身のあとがきはこう記している。「昭和二十二年四月、広島県知事選挙に、突如として自分は民主陣営より推されて立つことになった。私は京都の知友に費用その他の応援を依頼した。三一書房からは直ちに原稿

料が届いた。それを力に私は立上ったのである。」ここで知友というのは、久野収、新村猛、辻部政太郎、富岡益五郎などの各氏のことである。彼らはいずれも、一九三五年前後、いよいよ狂暴化しはじめた軍国主義的風潮のもとで、中井とともに「美・批評」「世界文化」「土曜日」などの一連の反戦文化運動をにないあい、強いられた苦闘のなかで中井の特異な思想形成に力をかすのを惜しまなかった友人たちであったが、いままた知事選挙に当って尽力してくれる彼らのねづよい友情に接して、中井の心ははげしくふるいたち、ひたすらみずからのたたかいをつづけたのである。そして「戦終って、この稿を手にしたとき、身に泌みとほる友情と云ふのか、歴史の見えざる力学の網と云ふか、私は美しい綾なす力の中に包まれる想であった」と、静かな心境を洩らしているのである（傍点は筆者）。

ところで久野収氏は、この後でも中井の『美学入門』に後書的解説をもって手をかしたのみか、一九六二年には、これまで埋れたままかえりみられることのなかった中井の労作「委員会の論理」や、週刊新聞「土曜日」の巻頭言として執筆したかずかずの美しい啓発的な文章などを編んで、いわば中井の実践的相貌をつたえる異色の論文集『美と集団の論理』を公刊したこともある。[1] これには、久野氏がはじめてめんみつに着手した中井正一論でもあるところの「編者のことば」が収められているが、その末尾のところに「もし読者諸君が支持をひろげてくださるなら、私は中井氏の全集を編みたいと願っている」というふうに、すでに全集編纂の抱負が予告されており、さらに「いかなる人物が、いかなるグループが、中井正一の正しい遺産相続人になるか。本書はそのためにこそ編まれたのである」と記されていたのであった。[2] つまり中井の著書の大半は、多かれ少かれ久野氏の熱意とサポートを抜きにしては考えられないのであって、われわれはここに一種思想上の執念と化した中井評価の心情をうかがいしることができるのである。「私は中井氏の死後はもちろん、生前の時機でも、困難な問題におしつめられ、視力に自信がなくなるたびに、中井氏に会うことができればと焦げるような思いにかられる」。[3] この久野氏のことばはほとんど何げない調子でいわれているが、しかしわたしには、それは、ほとんど局外者のすべりこむ余地のない或る閉ざされた、緊密な体験空間でもあるよう

に思われる。

焦げるような思い、と氏はいう。これはもちろん、中井が並はずれた人間的魅力の持主であったとか、現実に対するすぐれて前走的な思想形成者であったとか、そういう次元での追慕の心情であるとのみはいいきれない。そうではなくて、彼（ら）がファッシズム顕在期の時点で中井とわかちもった学問上の共通体験、その独自なグループ編成と運営のプロセス、そしてそのにがにがしい苦闘と挫折の実態にまでさかのぼるところの、まさに「歴史の見えざる力学の網」にほかならないのではないか。彼らは、多くの知識人がもっぱら蒼ざめた自我の孤立感に、夢想の小宇宙に、世俗の頽廃に後ずさりしつつあったなかで、むしろ自分たちの自由な学問的理性を守る立場から、それぞれの研究分野に介入しきたるファッシズムの論理、統制主義の論理とたたかわざるをえないと語らいあった。わけても一九三三年の京大滝川事件を契機として、自由主義者の陣営すらももはや安全地帯ではないという自覚があった。「世界文化」グループに加わったメンバーは、ことごとくこの滝川事件の背後に国家権力の学問に対する不当干渉の策動をみぬいていたし、またそのためにこそ奮起せざるをえなかったのである。[4] そして「世界文化」のたたかいは、実はもうひとまわり大きい視野からいうと、在来のマルクス主義運動のあまりにもリゴリスティックな教条主義的偏向をしりぞける一方、日本ローマン派系運動の審美的・神話化的偏向にもつよい違和感をいだきながら、いわばこれらの対極的な思惟構造のあいだにはさまれながら、真に主体的な文化創造の方向をきり拓くところにあったとみられるが、これは急進的前衛主義者の側からはインテリの自慰行為とか日和見主義といったしたたかな酷評をまねくことにもなった。真下信一氏も指摘したように、ヒューマニズム合理主義、プラグマティズムと世界主義という共通標識のもとに時局抵抗的な統一戦線をくんだ「世界文化」ではあったが、[5] しかしその柔軟な構想も当時の学界や論壇の趨勢からはほとんど爪はじきにされたままだったわけである。[6] したがっていきおい彼らの内面には、学問の逸脱や社会の歪曲に対する或る鬱屈した心情といらだった緊迫感がいりみだれ、いっそう烈しく沈潜した友愛感をはぐくんだのではなかったか。そしてそれが中井のいう「美しい綾なす力」の原型で

あり、彼らの集団主義的な体験空間の原型であったのではないか。

久野氏をはじめとする同人の内部になおも強固にやどりついている中井追慕の心情は、こうして当時の閉ざされた思想営為の所産を次代への歴史的遺産としてあけはなとうとする全集刊行の事業によって、ようやくいま転生の機をつかんだのだとみなすべきであろう。

それにしても現今、中井研究の関心がたんに彼の美学形成の軌跡をしめす論文内容の分析にそそがれているだけというのは、わたしには片手落ちとしか思えない。むしろそれと並行して一層推進されるべき問題は、とくに一九三〇年ころから三七年末にかけてのグループ変遷の実態とその「抵抗」過程のなかで中井の位相を実証的に解きあかしていくことでなければなるまい。中井正一全集の刊行が、こうした一九三五年ごろの京都での文化運動の実態と意義を新たに問いかける機運をつくりだしつつあるのも、当然の成りゆきである。けれどもそれはまだ、どちらかといえば可能的な機運にとどまっており、しかも単一個人の記憶による記述が誤りを含んだまま独走する危険もないではない。したがって当面の中井研究のポイントは、梯、和田、久野その他できるかぎり多くのひとたちの当時の記憶表象を相互に照合し対話させる作業を行い、そこから可能なかぎり「事実」の正しいイメージを再現させ、記憶ちがいや評価面の誤謬を削除していくこと、すなわち各人の記憶像の提出とそれら相互間のコミュニケーションによるげんみつな実態把握を推進することでなければならない。そして逐一の事実を裏づける可能なかぎりの資料の蒐集と確認の作業が、これとの関連でこころみられる必要があるであろう。中井美学の思惟構造そのものとは一見かかわりのないようなアプローチではあるが、わたしはむしろかかる「世界文化」グループの学問上の共通した体験空間を等閑に付しては、真の中井評価は期待できないものと考える。(7)

(1) 同書所収の「土曜日」巻頭言は、久野氏の解説ではすべて中井執筆として扱われているようであるが、われわれが調べたところでは、十篇近く能勢克男氏執筆のものがまじっていることが明らかになった。詳細は、本誌上の平林論文についてみられたい。なお「土曜日」中の記事にかなり中井執筆と推定されるものが摘出できるが、これは関係者とともに慎重な確認作業をこころみたうえで、改めて報告する機会があると思う。

(2)(3) 同書、三〇〇ページ。

(4) 新村「昭和十年代の文学的体験」(『文学』一九五五・二月号)、同「民主戦線の思想遺産」(『思想の科学』一九六一・九月号) 和田『灰色のユーモア』二六頁、武谷三男『弁証法の諸問題』八頁、久野「ファッシズムの勝利」(『抵抗の学窓生活』二二頁以下) その他。久野氏は、或る討論会で「世・文」結成についてこういう発言をしている、「滝川事件でわれわれマルクス主義を含めた自由主義勢力はなるほど政治的に敗北したかもしれんが、しかし文化的敗北とか勝利は政治の敗北だけで決定されるものじゃないから、もう少しねばり強くやろう、という気持が生れ」た云々(荒、佐々木、平野、本多共編『討論日本プロレタリア文学運動史』一四三ページ)。

(5) C・S主催の「世界文化」同人との座談会テープによる。

「学生評論」のばあいもこれに近い。メンバーの一人だった小野義彦氏も「学・評」の立場をふりかえって、「合理主義・人道主義・民主々義」の三つを指摘している(『学生評論』昭・二二年八・九月合併号)。なお「学・評」については住谷・高桑・小倉共著の『日本学生社会運動史』一九五三、渡部徹編『京都地方労働運動史』一九五九などに、その記述がみられる。

(6) 前記「近代文学」同人の討論会での久野発言には、当時の左翼文化運動に対する批判的言辞がある。「根本的なイデオロギーとしては、当時の左翼の文化運動というものがイデオロギー論争であって、相手方が自分の立場と違う、自分の方はプロレタリアートの味方だから、相手方は自分と違うから、必然的にブルジョアジーの味方だ(笑)、といわんばかりの論法が相当多かった。遠いところからはそうみえた。何か批判はしているけれども、本当に現代の科学や文化を克服した高いものを生み出す点では非常に足らないところがある。味方に出来、友達にすることの出来る勢力を敵に廻しているようなところがあるんじゃないか。われわれとしてはそういうやり方をやめて……」(同書一四四ページ)。

(7) わたしは中井美学をもっぱら機能主義者の観念論的逸脱(妄想)だとする三浦つとむ氏の見解も(「中井正一氏の美学の変革」―「現状分析」誌二五号、「機能主義者の妄想」―「試行」誌十四号)、またそれを「近代日本のもちえた最高の、またもっとも独創的な学問の一つである」とする多田道太郎氏の見解も(中井全集第三巻所収の解説)、ともに的確な、なっとくのいく中井正一論とは認めていない、むしろそれ以前の段階に属していると解している。

三

ところで中井全集は、いままでのところ第二巻『転換期の美学的課題』と第三巻『現代芸術の空間』がでているだけで、あと第一巻『哲学と美学の接点』と第四巻『文化と集団の論理』は、どうした事情か、刊行予定期をはるかにすぎているいま、まだ現われていない。遅延の事情がいささか気がかりであるが、近く第一巻がでるということも耳にしているので期待して待ちたいと思う。

近代日本における美学思想史の展開のうえで、全集として業績をまとめられたのは、鷗外、樗牛、抱月などの半ば作家的立場にたつひとたちをのぞけば、深田康算ただ一人という実状である。もっとも大西祝、西田幾太郎、田辺元、

和辻哲郎、三木清、戸坂潤などのように、哲学者でありながら少からず美や芸術への洞察力を有していたひとたちがいたことも確かであり、その成果についての検討も皆無というわけではないが、卒直にいってまだ日本近代美学史の研究は暗黒のなかでの模索の段階をでていないし、美学研究上の一領域をかちとるまでに至っていない。その理由の一半は、われわれの美学研究そのものがなお西欧系美学に密着したまま、自国の精神的社会的風土への還帰路をみいだしあぐねているところにあるだろう。また、西欧系美学の受容と移植のかぼそい、たどたどしい足跡をえがく日本近代美学史の光景が、ただそれだけで何かうとましいものと映じやすいのも、否めない一つの理由かと思われる。さらにそれらと並んで、体系的美学のアカデミズムがひろく芸術、文化、社会、産業機構、教育、信仰などのもろもろの思想的連関に対して尖鋭的な触覚をはたらかせえないために、かえって在野の生きた美学思想をも遮断しがちになり、ひたすら講壇美学の牙城をきずくことに傾注している、そういう美学の独占販売的観念がここにも災いしているというべきではあるまいか。

ともあれ中井全集は、彼の恩師にあたる深田康算の全集につぐ偉業として美学史上、一つの記念碑的な標識となることができよう。ひとはそこに、一つの生きた思想としての美学の胎動をみいだしうるであろう。

さて全集第二巻は、第一部に現代芸術理論の基礎をふんまえた諸論文、第二部に絵画や映画に関するエッセイ、第三部に日本の伝統的美意識をえぐりだした論文が配列され、そして資料（大学での講義ノート）二篇が付録にはいっている。とくにこの資料発掘は、研究者には見のがせない貴重なものだろう。一は昭和七年ごろ大阪相愛女子専門学校での講義にもとづく「転換期の美学」と題したノートであり、他は戦後尾道で行った啓蒙運動の一側面を示す「美学概論」である。

第三巻には、まず単行本『美学入門』を収録し、つづいて中井の映画論文や映画評、さいごに機械美や文学、探偵小説、劇や美術についての随想などが並べられている。いまこれらについて逐一紹介する必要はないが、総じてわたしには、中井の発想法における内面的緊張度という点では、戦前（一九三〇～一九三七）の文章のほうが戦後のものより

もずばぬけて高いように思われるし、また戦前における問題把握の前走的能力が戦後時点ではかならずしも鮮やかな光芒をえがきえなかったのではないかと、考えさせられるのである。あるいはこれは国会図書館副館長としての役職上の激務によると、いうべきかもしれない。が、それにしても戦後時点での中井の位相がどうもくっきりと像を結んでこないのは、第一節のとこでふれた落差問題とともに、われわれにとってはすこぶる遺憾なことがらとしなければならない。

たとえば和田氏のばあい、敗戦直後に特攻隊帰りの死にぞこなった青年から、「自由主義的インテリゲンチャというのが戦争に反対だったというのですが、一体彼らが何を考えていたのか、ぼくにはさっぱり分らないです」と、かんで吐きだすようなことばをなげつけられたとき、何とか答えなければならない立場にありながら、ついにその場で説明することができなかった。氏が当時のことをかく気になったのは、「その負債をはたすため」なのであった。(1) 梯氏のばあい、官憲側からの強要ででっち上げたみじめな転向声明書の内容を、あえて恥辱をしのんで彼に曝けださせたのは、「暗い谷間の明るい眼、非転向の実存者たる永島君の獄中からの眼ざしに堪えられなかったからである」。(2) 要するに、いずれも自己の傷ついた内面に射しこんでくる詰問ふうの視線、いわば死の世界から闖入してくる視線を身ぢかに意識し、その視線のもとで自己の座をたてなおそうとつとめたのである。はたしてこうした刺しつらぬくようなキツい視線が中井のうちにもあったのかどうか、いまとなってはわからない。わからないだけに、一層何かもどかしい想いにとりつかれざるをえないのである。

(1) 和田洋一『灰色のユーモア』一一四ページ。

(2) 梯明秀『戦後精神の探求』二〇八頁、あるいは一九八頁。永島(孝雄)は「学生評論」の中核メンバーで、「京大ケルン」を組織した。一九三八年に逮捕され、一九四一年獄死にあった。和田氏の本にも登場するが、野間宏『暗い絵』にでてくる永杉英作は彼をモデルにしたものだといわれている。

四

ソビェトの記録映画「春」をとりあげた中井のエッセイは、一九三一年にかかれたものだが、こういう出だしで始まっている。「すべてが冷たく、涸れて凍っている冬が次

第に崩れて、……春がくる。朗らかな、暖かい、みんな芽ぐみはじむる春がくる。歴史の幾コマかは絶えずいつも時代の冬の中に浸された。そして永い間人々は春を待つ[1]」

これは、今村大平氏も指摘したように、「中井の生きた時代の危機と絶望の冬の底から垣間見た春である[2]」が、しかしエッセイ末尾のところに中井が「しかしわれわれの春はまだ浅い。冷たい、涸れた、凍ったものがいっぱいである。春はまだあの空のうちに眠っている」とかきつけたとき[1]、すでに彼の心には静かにたかまりゆく「抵抗」線への胎動があったように思われる。垣間みた春に対する信頼ときびしい冬の中での憤怒とが、これらの文体の背後に抑制されているからである。それがまだ、低い社会的緊迫感にとどまっていたにせよ、この一九三〇年ころからの中井の執筆エネルギーの上昇線には、めざましいものがある。

わたしはこの上昇線への推移に介在していた彼の重要な問題意識の一つは、何よりも文学の言語構造についての一連の研究、そこに胚芽として含まれていた言語的空間構造への着目にあったのではないかと考えている。「言語」（一九二七・二八）「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」（一九二九）「意味の拡張方向並にその悲劇性」（一九三〇）「文学の構成」（同）などの論文がそれであり、それはやがてベッカーの存在論的空間概念の摂取をへて「芸術的空間」（一九三一）「芸術の人間学的考察」（同）などの弁証法的美的空間論の構築のうちに伸びていったわけである。これらが重要なゆえんは、たえずハイデッガーやベッカーの存在論的構想を射程内にすえながら、しかも彼らの暗部ともいうべき社会的情況と実存的主体とのかかわりあいを新たに力説し、情況のなかでの自己転換の弁証法を問いつめようとしているからである。

たとえば、彼によると、芸術の発表ということには、ワレとワレを凝視する自分の前に無限に省みてゆく充足的な方向と、作品を他人の眼の前に提出する拡延的方向という二つの種類がみられるのであって、前者は自我の内面における芸術的意味の質的深化、後者は社会の内面における意味の量的展開とよぶことができる[3]。同じように言語についても、無限に内へ問いかける意味の方向と、無限に他者へ問いかける意味の方向があり、前者は意味の充足としてのモノの模索であり、思弁とテオリーとディアレクティク

（弁証）による科学となるが、後者は意味の拡延としてのモノの模索であって、歴史とプラクシスとディアレクティケー（討論）による実験にほかならない。[4] このやや抽象的な対比法をつかいながら中井が狙っていたものは、主体の意味充足的局面をおもんじた被投・投企の構造論へと傾斜しているハイデッガー的視角をいかしつつ、一歩一歩その意味拡延的局面をも立てなおし、これによって実存的主体そのものの社会化（集団化）の論理を対峙させようとすることであった。すなわち時間概念を軸とした人間的現存在の疎隔に対して、空間概念を軸とした疎外的事態をするどく対決させようとすることであった。そしてこの人間の疎外・隔離が、剣や十字架や科学や機械や商品によってひきおこされてきた歴史上の「悲劇性」として語られるとき、芸術創作の意義はまさにこの実存上の「悲劇性の諦視」以外にはないとしなければならない。このばあい「悲劇はより深い悲劇性すなわち創作の苦悩へその面をむける。それはより深い「自分」すなわち存在への肉薄である。より深い時の出現である」。[5] 芸術的意味の充足と拡延の弁証法的ヒエラルカイヤは、こういう悲劇性としての空間性もしくは疎外性の事態をめぐって、はてしなく展開し深まりゆくものと考えられているのだ。

こうして中井は、外部世界・他者の領域へはりわたされた動態的な関連構造を追究することによって、集団化された主体のありかたとその弁証法的機構をごういんともいえる手つきでたぐりよせていたが、充足化→拡延化→ヨリ高き充足化という美的主体性の躍進のプロセスがこれほどアクチュアルに定位されえたのは、当時としてはすこぶる異例のことがらにぞくする。いうまでもなくここには、新興の諸芸術のうちに垣間みられた悲劇的緊張性についての前走的な論理化がややかた苦しいままに定着しているのである。

中井の理論形成上のこうした上昇線は、いちおう人間学的美学という呼称をゆるすであろう。しかし滝川事件をへて一九三五年二月の「世界文化」創刊、一九三六年七月「土曜日」発刊のころになると、もはや彼の問題意識は美学プロパーの容器には盛りきれないものとなり、理論上の抵抗線から進んで実践上の抵抗線へとひろがっていったように考えられる。一方では、能勢氏にさそわれて京都家庭消費組合に理事として活躍した経験をもとに労作「委員会

の論理」（一九三六）を、また巷間に横行する非合理主義的ムードへの反撃をこめて「合理主義の問題」（一九三七）をかきあげたが、これらはファッシズム激化の時局に対する理論的抵抗線を彼なりに固めようとしたものである。他方、市民の意識のあいだに国策への抵抗線を浸透させようとした「土曜日」巻頭言の美しい啓発的な文章がつぎつぎとかきつがれた。いきおいこの時点では、まとまった美学論文の作成はうちすてられ、かえって実践的な思想活動の側面が前景にせりだしている。はるかに充実した詩魂とはるかに緊張した論理力が交錯しあった、おそらく中井の生涯のうちでもっとも力にみちた時期だったかと思われる。

この時点で中井が直面していた問題は、おそらく今日もなお切実なひびきをもって迫ってくるものがあるが、その一つに合理主義の弁証法的機構をめぐる洞察があげられていいだろう。簡単に一瞥しておくと、こうである。

「「否定のない拒否」これが現代人の一つの特徴である。それがベルグソン流の時間概念の中に組込まれてくると、一瞬一瞬止まるものなく、一瞬一瞬の否定、この矢の過ぎゆくような脱落、これが唯一の現実である。この速度のある推移の直観、無の諦観に似たはかなさ。合理的なものは過去である。この今と此処と此、これこそ現存在である。こんな思想が合理主義への対立物として流行するのである。凡てに嫌だ嫌だといって従っているのである」[6]。中井はこれによって当時の低迷せる思想界の非合理主義ムードをえぐりだすとともに、合理主義というものの在るべき方向をも標定していたのであった。

彼はそこで警戒すべき三つの点を指摘する。まず人間の対立者たる利潤機構が、自らの姿をかくしたままで従僕の合理主義へと攻撃をそらしているそのトリックに、つぎにこの金融ブロック経済の利潤機構に統制主義と全体主義の全てがぴったりと合致してくる危険に、さいごに複雑にこみいっていて現実が判らなくなるということ、また現実の矛盾に対するなげやりな拒否の態度からダダ的、サンジカリスト的なものが発生しテロ化するという非合理主義の危険に、するどく注意をうながし、転じてつぎのように結ぶ。合理主義とはむしろ「物の中に潜む法則的威力へのすなおな依存」であって、たんなる「主義ではない。人為的なものではない。人類の依存する自然の中に厳としてある法則

性に対して謙虚であること」だ。そのとき「人間は、人間の中の秩序の中に、星の秩序を越えて尊厳なるもののあることを知」り、「自らをより高い秩序の中に導くことができる」のを知るのだ。しかも「この合理への熱情は、すでに**依存**ではなくて**創造**である。これが**自然の合理**より**技術の合理**への飛躍である。人間が言葉を発見し、火を発見した時より、この議会制度をつくり、電気を水より奪いとっている現在まで、凡ての闘いは、この合理への一貫した闘いである。[7]」自己自らを否定的媒介として躍進せしめつつ、同時に社会現象に対する**批判**の自由についてたたかうことが今日、合理主義に課せられた緊急の、最大の課題でなければならない。それが真に歴史を嗣ぐ心だと、彼は信じてやまなかった。

こうして、中井の抵抗線は人間性の尊厳を核心とした批判的合理主義の一貫したたたかいのうえに定位され、現象の内なるロゴスから逸脱せず、まともに創造面へ見透しのきくプログラムミングをはらんでいたのであった。彼のこれまでの思索のエッセンスをすべて投入した力作「委員会の論理」も、かかる抵抗線上の一頂点を形づくっていたものに、ほかならない。

このころ「春はまだあの空のうちに眠っている」筈であった。しかし事態はそれどころか冬の嵐がたけり狂い、ありとあらゆるものが凍結してしまう最悪の季節、あの大カタストロフへとのめりこんでいったのである。

では戦中の中井の位相については、どうか。目下のところ「感嘆詞のある思想」という孔子についてのエッセイがあり、ほかに京都新聞のコラム「橋頭堡」「気球弾」にいくらかありそうだが、いまはもうこれらについて触れる余白がない。[8]

(1) 全集第三巻、一四三頁、一五一ページ。
(2) 「解説」第三巻、三三〇—一ページ。
(3) 中井正一『美学的空間』弘文堂、二五九ページ。
(4) 全集第三巻、二六〇—一ページ。
(5) 『美学的空間』二六五ページ。
(6)(7) 中井正一「合理主義の問題」(『学生評論』第一巻第八号昭十二・三・四月合併号一二、一四、一五ページ)。
(8) 中井正一「感嘆詞のある思想」(『学海』第二巻第三号昭二〇・三月号四六頁—五一頁)。なお新聞コラムの小文は、最近、富岡益五郎氏との面談調査のさいに聞き及んだものであるが、一九四四・四五年の時期の執筆で、無署名である。文体、発想法、主題などの面で中井執筆と推定することができるが、いちおう関係者の確認作業を必要とするのでいまのところ断定はさしひかえるべきものであろう。